

Link “新風”

第35号
(通算 第128号)

いよいよ草木が生い茂る「弥生」となり、冬の閉塞感から開放されるような気分になるのは私だけだろうか。我社は、丁度この3月に期の後半を迎えるわけで是非とも新生“赤武エンジニアリング㈱”を誕生させるために頑張っていきたい。思えば、当社が今期第39期をスタートした昨年9月に奇しくも民主党政権の誕生となった。

現在鳩山内閣は多難な運営にあるが、真に国民が納得する国民のための政治に身命をかけて突き進んで欲しいと願うばかりである。

それにしても政治家は、政権が変わっても相変わらず自己保身に走り、立場が変われば主義主張がまったく逆になるという“変な原理原則”がまかり通っていることに腹が立つ。政治家は、選挙で訴えた公約の進捗状況を報告し、今、市民が何を考え、何を求めているのかをしっかりと把握し、それを国政に反映させることが重要であることは間違い無いと思う。我々市民の側に降りて市民の目線に立ち経営者と同じいわゆる三現主義を貫くべきである。選挙の時だけ顔を見せて頼みますという時代は、終わりにしてもらいたいものである。会場費を参加者から徴収して大会場で報告会や各政党が討論などを行ってもいい。事業承継、教育、医療、農業など問題は山積している。次世代に負担を増大させることなく大胆な発想で解決に当たって欲しい。

農業といえば、先ごろ、小泉武夫氏(東京農業大学教授)の講演を聴く機会があった。

発酵学・食文化の第一人者でありマスコミでも馴染みの先生である。「農業ビジネスで日本を救う!」の演題の講演の中で、日本の食料自給率は40%を割ってしまいそうな状況で、知恵を出し自給率を上げていかなければ次世代に大きなツケを残すことになるという警鐘を鳴らしている。日本と英国の比較を挙げて、1968年の日本は自給率78%、英国のそれは42%、2009年は日本が41%、英国は74%と逆転。英国は国で農作物を買い上げる手法をとった成果とのこと。日本は、抜本的に土作りからやり直していく必要があるとし、福島県にある堆肥化施設「三風」や大分県「大山農業組合」の成功例を挙げている。生ゴミは、燃やすものではなく土に返し発酵させ、生きた土壌を作ることが大切であり、そこで育った農作物は、人々を豊かにさせる力がある。国民の食が乱れてくるとその国の社会も乱れてくると言い、「朝食は毎日食べる、できるだけ地元で作られたものを食べよう、畑や田んぼに出て農業のすばらしさを知ろう、どんなものを食べたか食べ物日誌をつけよう、行儀良く・礼儀良く食べよう」と提唱し、「食べることは人生の勉強である。食べ物を与えてくれた人に感謝し、食べ物を作ってくれた農家の人に感謝する気持ちを忘れてはいけない。自分たちの育った土地のものを食べて皆で明るい社会を作ろう」とも言っている。食事は人を育てる、そうして日本文化を守っていく必要があるとも。我社の回りの田んぼも年々埋められていき殺伐とした風景が出現している。何とか緑豊かな昔に還れないものかと思う。

企業にあっては、日本独特の文化に基づいた経営手法があり成長を遂げてきた。成果主義一辺倒やグローバル化が横行、日本国力はますます削ぎ落とされる一方である。日本経済を支える約420万社の中小企業は自己責任の下、必死で生き残りをかけているが廃業・倒産に追い込まれている。

国策と企業のたゆまぬ精進が相俟って“もの造り日本”を再復活させ、次世代に夢をつないでいかなければならないと考える。

我社も企業文化をしっかりと育み、もの造り日本に貢献していきたい。

社長 赤堀肇紀

